

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第10回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事録

日時：2020年1月7日（火）15:00～16:30
場所：釧路地方合同庁舎 4階 第3会議室

【出席者（敬称略・順不同）】

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌
- ・釧路湖陵高等学校 渡辺 理実

<学校教育行政機関等>

- ・北海道教育庁釧路教育局 教育支援課 指導主事 綿谷 泰
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 蠣崎 浩一
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然再生企画官 中西 誠

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然保護官 矢部 敦子
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

事務局 第10回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ（以下WG）を開催する。

（配布資料の確認後、事務局より出席委員を紹介）

以降の進行を高橋座長にお願いする。（以降、高橋座長により進行）

議事1 ワーキンググループの取組み報告

事務局 資料1に基づき説明。

高橋座長 本日参加いただいた委員の中にも報告にあった取組みに関わりを持った方、参加された方もいるので、補足やご意見をいただきたい。まずは、釧路湖陵高校の渡辺先生に、これまでの取組みに関しての感想、生徒の様子、反省点、今後の予定などをお聞きしたい。

渡辺委員 湿原での地域巡検は4年目になるが、5年前までは知床をフィールドとしていた。釧路にある学校なので、4年前にフィールドを湿原に変え、赤沼と久著呂川を訪れた。一番良いところと、衝撃的な場所の2点を見ることでスタートした。スーパーサイエンスハイスクールとしては、行って感じるだけではなく、もう少し科学的なアプローチをさせたい、1年生の段階で理数科1年生全員にフィールドワークをさせたいと事務局に相談した。達古武の自然再生事業地で、水生生物の調査、昆虫を使った多様性の調査をプロに教えてもらいながら体験できるということで、3年前にフィールドを変え、この取組みが3年目となった。1年に1回きりの調査で、生徒達も限られたデータで何が言えるかに苦しむが、体験することでわかったこと、わからなかったことなどを感じながらの取組みが3年経った。

毎回アンケートを行うが、1年間のスーパーサイエンスハイスクールのプログラムの中で一番良かったものとして、昨年の生徒は釧路湿原のフィールドワークが一番多く挙げた。行ったことがなかった、行かないとわからない、地元なのに知らないことが知れて良かったなどの意見が多かった。このプログラムは行って終わりではなく、6月にフィールドワークを行った後、2月まで学習は続いている。8月に日本語でまとめたものを指導いただき、今年度は湿原および教育関係の2つのJICAのプログラムがあり、英語で伝える体験を行った。2回繰り返すと2回目は少し話せるようになり、最後に2月に英語で口頭発表を行う。1回経験したことを何回も発表会を繰り返すことにより、その都度、考察を深めていく。フィールドにもう少し行ければ良いと感じているが、1年間の中で柱になるプログラムとして3年間取り組んできた。

課題としては、回数が増やせないか、釧路湿原の定義がわからないが達古武湖は直接湿原を感じられるものではなく、若干違うように感じる。本日午前中にフィールドワークに参加したが、湿原に入ると高層湿原を体感できたり植生の変化の様子が見ることができた。そうしたことが必要と感じる。40人の学生が入ることで植生を傷めてしまうということが赤沼を止めた理由の一つだったが、今日の体験から、冬であれば影響が少ないと感じた。理数科の取組みであれば、データにもこだわりたいと考えており、新庄さんの解説では、今朝のフィールドでも科学的な分析が可能というお話があったので、ステップアップできるチャンス为本日いただいた。

全校体制でスーパーサイエンスハイスクールに取り組んでいかなければならないということが昨年度からの2期目5年間の取組みになっている。総合的な学習の時間は、現在、総合

的な探求の時間と名称が変わっているが、普通科の生徒も自分たちでテーマを決めて探求活動を行っていくプログラムとしている。30人程の教員がいるが、昨年度までは先生方が自身の得意分野でテーマを決め、そこに生徒が集まってゼミ形式で行っていた。生徒とのマッチングが課題で、第一希望に行けずに第五希望になったりということがあった。今年からは、自分達のテーマで取り組むようにしているが、湖陵高校として継続して探求を深めていくのがなければ、毎年生徒が変わるとなかなか深まらない。そこで、学校として追及していくテーマを3つ設定している。1つが釧路湿原で、2つめが津波防災。宮城県の高賀城高校と連携しているが、津波や防災に特化した探求を行う学科である災害科学科を持っている高校で、日本で2校しかない。釧路も津波がいつ来てもおかしくない地域なので、津波防災をテーマのひとつとしている。もう1つは、これまでも続いてきたテーマである釧路市街地の活性化。これら3つのテーマには高校として取り組もうと生徒を募集したところ、概ね20人から30人ずつ集まった。今年からスタートしたもので、どのように指導していくか、生徒達も手を挙げたものの、どうしてよいかわからないという部分がある。教員が少しフィールドワークを引っ張ってあげて生徒に体験させるなどを行わなければ、生徒達だけでは探求していくことが難しい部分があると感じている。現在、その難しさにぶつかっているが、こうした取組みをスタートさせた。その中には標茶町や弟子屈町が出身の生徒もおり、小中高と学習がつながっていけばと感じる。先ほど発表の機会づくりという報告があったが、高校でも継続的に取り組む体制を作ったので、湿原をテーマに縦のつながりが出来ればと思う。また、高校生が小学生に指導したりすることで別な気づきもあると思うので、そうした機会が作れば面白い。現在は動き始めたばかりなので、生徒のテーマに教員がどのように指導していくかが必死なところではあるが、理数科については安定した取組みが出来ており、普通科もそのように動き出したということ報告させていただいた。

高橋座長 少しずつ内容が成熟してきている。知床から湿原にフィールドを変更したということであるが、それぞれ決まった年数などの想定はあるのか。

渡辺委員 特に決めていない。

高橋座長 とても面白い取組みをうかがった。以前にも挙げられていたが、小中高で学習内容が切れるのではなく連続していくことで、少しずつ深めていくことはできないだろうか。高校同士で協同する、分担しあっている研究などは行えないだろうか。追及できる可能性はあるだろうか。

渡辺委員 標茶高校の取組みは、高文連の理科の大会で発表が行われている。湖陵高校の理科系の部活動の生徒はそこで共有できているが、学校同士の共有まではしていない。

蠣崎委員 資料1の取組み報告の一覧を見ても中学校は1つもない。どうしても義務教育の中で小学校と中学校の違いは大きい。高校は義務教育ではないので意外と自由度はあり、特に標茶高校は総合学科で、自分でテーマを決めて取り組み、自然環境をテーマにして生徒は自分達のグループで研究したことを大会で発表する。標茶高校の生徒に、湖陵高校の発表はどうだったか聞くと、頭のつくりが違う、レベルが違うと答えていたが、いろいろな意見をもらっていたようだ。自分達には気が付かないことに意見をもらえる場なので、生徒同士でどんどんキャッチボールできると良いと感じる。高校はいろいろな発信、受信の機会がある。義務教育にはあまりない。どうやったら中学校が絡むかということは、とても難しいこ

とと感じる。ここに中学校が挟まってくると、小中から高校へのつながりが付いてくる。
高橋座長 高校が非常に熱心になってきており、小学校は継続して取組みが行われきた。中学校で学習が切れてしまう。

蠣崎委員 標茶町では昨年 11 月に町長が替わった時に、義務教育が終わるまでの間に 1 回カヌーでの川下りを体験させてやりたいという思いがあり、中学校で卒業するまでの間に 1 回、中学生にもカヌーに乗せたいという話をした。かなり時間をかけて校長会と揉んだが、時間確保が難しいということで、中学生は乗らずに小学校で卒業までの間にということになった。標茶町で小学校の教育を受けている子は、間違いなく 5 年生や 6 年生の時にカヌーで釧路川を下り、中から湿原を見るという体験はできる。そこにどれだけ課題意識を持てるかということが、これからの町の課題だと考えている。中学生を何らかの形で引っ張り込みたかったが上手くいかなかった。

高橋座長 1 つの課題であるが、可能性はあるように思う。幌呂中学校の長谷先生が本日参加いただいているが、地域的には恵まれた場所にある中学校かと思う。小学校と中学校との学習のつながりという部分で可能性はないであろうか。

長谷委員 今年転勤したばかりで、カリキュラムや総合的な学習の時間に意見する立場にはないが、話を伺っている中では、タンチョウを守るというテーマが幌呂は強いので、タンチョウを守っている自然環境の方に目を向けさせることで、総合的な学習の時間の 2 時間から 3 時間をフィールドワークに充てることは可能なのではないかと感じた。小中高の連携に関しては、標茶高校の先生と話す機会があり、標茶は高校と近い場所に大きい規模の小学校、中学校があるので、高校生から中学生に、中学生から小学生に、高校生から小学生にという取組みを行なえば面白いと話したが、すぐに行い始めた。標茶高校のようにターゲットが絞りやすい学校は良いが、例えば湖陵高校はどこの中学校をターゲットにするかを考えると難しさも感じる。

高橋座長 フィールドに自分の体を置いてみるということが、とても良いことだろうという話があったが、発想のきっかけになるかもしれないし、学習を刺激する要素になるかもしれない。数少ない機会を捉えて実現していただくだけでも違う。生徒が現場に赴くということを学習の中に要素として取り入れることはできないだろうか。

綿谷委員 自身も理科に携わってきた。自然に触れ、自然を通してということが最初であり、それが無く教科書上で行ってしまうことも多い。釧路での湿原ということなので、出来ることであれば自然ありきで学習を進められると良い。特に小学校の時には大事なことだと考えている。ワーキンググループの取組みを見させていただき、特に重要だと感じたのは、体験活動は点で終わることが多いが、事前や事後の発表など、年度を通して取り組んでいること。フィールドに行って終わりではなく、事前、事後の取組みのつながりがすごいと感じた。以前に小中一貫の施設にいたが、小中がつながってくると総合的な学習の時間のカリキュラムの擦り合わせを行う。小学校で湿原を学習していれば、中学校での擦り合わせなども、これからもしかして進んでいく部分もあるのではと感じた。

高橋座長 全体の話の中でいくつかの課題が出てきた。学習していく中で、どのようにつながりを作るか、地域の中で孤立した活動ではなく協力し合う、分担し合う形はできないだろうか、現実的に体験的な機会をどのように確保していけばよいだろうか。こうした様々な課題

があると思うが、どのように考えられるだろうか。

境委員 綿谷委員が言われたように、理科という教科は、当然最初は自然との触れ合いなど、自然的なことから始まっていくことがベースにある。中学校であれば第二分野であるが、特に小学校であれば地学や生物分野では、自然と触れ合う部分から始まる。流水のはたらしや土地のつくりなど、流域の考え方を湿原に最初に行き見ることで多様な授業ができるだろう。中学校については、自然に入っていくということが重要なことと思うが、現状を考えると、中学校で野外に行くということは難しいだろう。特に釧路市内の中学校になると、例えば大地の変化など、映像を見て学習するというで終わっているのではないだろうか。

中学校の新指導要領の今回の改訂の中で大きな改革をしたのが、1年生の大地の変化の単元。岩石、地層、土地の観察が一番最初に入った。指導要領改訂の話の中で、中学校3年生の第7単元はバッファーになっており、これまでほとんど行われていなかった。ほとんどが受験対策で終わられている単元があり、その改革が今回話題になっていた。その中で地学としては野外観察を入れようというものが大きなもので、中学校3年生の探求の過程を学んできた最後に野外観察を行うことによって、それを基にした探求をふりかえるということが目的だった。しかし、第7単元は時数を確保できないということで、元に戻ってしまった。ただし、地域の自然災害を入れようということになり、地域に戻って地域を考えようということになった。野外体験を行うということは何とか入れたいということで、様々な議論の中で、最終的に1年生の一番最初の段階に持っていこうということになった。これが、今回の最終的な指導要領の地学の話。一番最初に野外を入れるということは、指導要領のねらいの中では、とにかく中学校1年生に野外に出て欲しいという願いを込めた。例えば、学校の屋上でもよく、学校を俯瞰できるような高いところ、地域を見渡せるような場所に行き、自分たちの学校がどのような場所にあるのか見て欲しい、近くに露頭がない場合は、穴を掘ってでも良いので石を見て欲しいなど、その中で、小学校で学んできた見方、考え方を上手く使っていき見る事を大事にして始めよう。それが自然からの始まりだとして、地学分野の一番最初に野外観察を持ってきた。もしも中学校で指導要領の中身をじっくり読む機会があったなら、地学分野では、まず野外に出ましようということが意図的にされているということがわかるだろう。そこから始まっていけば、釧路であれば、地図を見ながらでも良いし、ドローンを見ながらでも良いので、上に行けば必ず湿原が見え、そうしたところから、釧路はどのような場所なんだろうといった展開が可能なのではないだろうか。そうした新しい実践が出てくることを期待している。

高橋座長 そのようになれば、かなり画期的なことであろう。

境委員 今回の指導要領の地学の一番の目玉は、野外観察を1年生に持ってきたところ。なかなか大きな話としては出ていないが、単元構成を見たときに、指導要領の一番最初に項目として挙がっていることは大変意味がある。とにかく観察してくれということが入っている。中学校は探求の過程ということが大きな流れになっているので、当然、自然から入り、探求をしていき、考察をし、まとめていくといったプロセス、資質向上の方がメインになっている。知識ではなく、理科を学ぶための資質をどのように学ぶのか。こうしたことが湖陵高校につながっていくのであろう。釧路市内の中学校が全て、資質能力ベースに先生方の意識が変換されていき、しっかり学ぶことが出来れば、トップの子たちが湖陵高校に行った時にス

ーパーサイエンスハイスクールはものすごく変わってくるだろう。

長谷委員 アクティブラーニングが言われた時に、探求や生徒主体ということが変われば、正にそのようにつながっていくものと思う。中学校の理科で困ると思うのが、まとめたり、表現したりする時に、国語力の表現力の低さが気になる。どの中学校に行っても少数の割り算はできない。小学校が悪いというわけではなく、言われていることを全てやろうとした時に、カリキュラムマネジメントをどれだけできるかということが重要で、小学校で出来る人は一握りしかおらず、中学校は教科担任制になってくるので、なお厳しいだろう。小さな学校であれば先生同士の距離が近いので、へき地学校を多く持っている釧路管内では、先生方の距離を近づけることでカリキュラムマネジメントが出来れば良い売りになるのではないか。

境委員 探求の過程そのものが学力につながるということが証明できれば良い。このワーキンググループが始まった時にもお話したが、とにかく小学校、中学校、高校とつながっていく中で探求の力をつけさせていきたいということと、いろいろな発表が小学校から定着してくれば、中学校、高校に行った時に、自分たちの研究スタイルが出来るようになっていくだろう。それを出来るようにしていきたい。学校で始まったことを次の町が行い、町が行ったことを管内で行うというように。現在、科学の祭典では、実験などを紹介するような場になっているが、管内でも良いので、子ども達の研究を地道に支えるようなシステムを作ってあげ、最後に研究していることを見せ合えるような場が年に1回持てると良い。子ども達の探求を育てるような企画が釧路管内で盛り上がってくれば良いなと感じている。そうすれば、縦の連携、横の連携がもっともっと良くなるのではないかと思う。

高橋座長 大学にいた時には、このような発想を持った高校生が来てくれればということ漠然と思っていた。同じように、湖陵高校でも、こういう中学生が入ってくればと、中学校でも、こういう小学生が入ってくればということがあるのではないかと思う。どのように学力を育てるかという部分で、標茶町では先進的なことを考えている。連携していくということについて、どのように考えるか。

蠣崎委員 小学生は小学校で育てる、中学生は中学校で育てるという時代ではない。標茶町では標茶中学校の学区、虹別中学校の学区があり、茶安別と塘路は元々が併置校。併置校では、9年一塊として小中連携をしていくことになっている。白糠のように一貫校という形ではなく、あくまで連携という、ふわっとした形の中でやっていこうということが今の時代の流れでもあり、そこを意識しましょうということになっている。様々な部分で、例えばキャリア教育での連携などがあるが、湿原で連携しましょうという発想にはなっていない。町長がマニフェストに打ち出して当選したので、せっかくなので中学校を抱き込んでと考えていたが、上手くいかなかった。そのあたりが上手くいき、中学生なりの精神年齢で川から湿原を見たら、また違う見方をしただろう。小学生の次のステップを持って見れたのだろうと考えると、やはりもったいなかった気がする。

それが点で終わっても良いと思う。経験値として少しでも残ればよい。何年か前に教えた子の一人で標茶高校に入った子が、僕は環境省に入ってレンジャーになるんだと言っていた。標茶高校で自分たちが持っているミニ湿原での学習を通して、もっと大きなスケールで湿原と関わりたい。湿原にどんどん入っていくような高校に行き、行く行くはレンジャーになるといって北海道教育大学岩見沢校に行っている。キャリアという視点で考えて、そこから

湿原に足を踏み入れるということもありだと思ふ。中学校ではキャリア教育を総合的な学習の時間を含めて学活中心でやっていくが、その中で、職業体験すればよい、職業調べをすればよいということではなく、いろいろな所に外に足を出して自分の知らない世界を知ったら、すごく興味がわくかもしれない。そういうものの1つに、このワーキンググループの取組みがあると良いのだろう。それが、授業コーディネイトや授業支援というものに当てはまってくる。何とか中学校に道を開けないだろうか。湿原学習、自然再生という視点では硬いので、キャリア教育の切り口から、環境省や環境財団と触れ合うことで、こんな仕事もあるんだと知ることもある。大学の先生も関わっているということも知るであろうし、湿原をフィルターにして多方面に気づきがあっても良い。そうしたきっかけとして、このワーキンググループがあっても良いと、最近はとても感じる。そういう形であれば、中学校を何とか引き入れられないだろうか。

高橋座長 例えば小学校の前で保護官の格好よい姿を見せると、刺激を受け、全員とはいかないまでも、1つのきっかけになるだろう。

蠣崎委員 12月の中旬に標茶小学校の6年生が防災学習のことでテレビに出た。標茶は川が氾濫して避難指示も出ている町なので、役場の防災係長や大学の先生が来たり、いろいろな学習をしており、今年で2年目になる。開発局の河川関係の職員が中心となり役場の係も入って、6年生が防災タイムラインを作った。6年生でもタイムラインを作ることができるということがテレビで紹介された。川は身近な場所にあり、川をたどれば行きつく場所は湿原。標茶町の43%は湿原であり、川は湿原にたどり着くということを見学は知らない。知らないのだから、土地柄の問題も含めて、それを知らしめるということでも良いだろう。そうやって経験を踏んでいった子が義務教育を超えて、高校に入った時に、自分が経験してきたことが必ずどこかで生きてくる。それが将来的にキャリアにつながれば、もっと良いだろう。

高橋座長 まだ議論を深めたいところだが、次の議題に移りたい。

議事2 第4期再生普及行動計画（案）について

事務局 釧路湿原自然再生協議会において決めている全体構想に基づいて普及啓発事業を行っていくこととしており、その内容を具体化したものが今年度まで動いている釧路湿原自然再生普及行動計画というものになる。本日報告した様々な湿原学習や教員研修は、その計画を具体化した取組みの1つとなる。この計画は5年毎に動いているもので、今年度はその改訂年に当たり、今年の春から動く4期計画（案）を資料2として添付している。2月に開催予定の自然再生協議会で最終的に諮られ、4月より5年間動いていく計画となる。

本ワーキンググループの取組みに関連する6ページ目を中心に、資料2に基づいて説明。

高橋座長 全てではないが6ページに記載された内容が、本ワーキンググループの使命となる。これまでも、いくつかの委員会を経て、言葉遣い、内容について議論し、次期計画案を作り上げてきた。資料2は釧路湿原自然再生協議会に提案する最終的な案であるが、この学校支援ワーキンググループは、どのような取組みをしていくべきなのか、期待も踏まえて追加する内容があれば、意見を頂きたい。

長谷委員 面白そうだと感じたものは、6ページ（2）に記載がある、さまざまな立場の人々を

つなぎ、協働による場づくりを進めるという部分。キャリア教育と学校教育を結ぶ部分、開かれた学校と結びつく部分と思うが、学校側が人を呼ぶ際には課題もある。様々な人を呼ぶ際の難しさを超えていくには学校単位では不可能で、仮にこのような場で仕組みを作っていければ、こうしたことが今必要だと感じながら見ていた。

高橋座長 これまでも議論があったが、学校は生徒達が安全に過ごせる場所であると同時に地域に開かれている場所でなければならないと、当たり前のように言われる。突き詰めていくと、場合によっては、この2つはぶつかることにもなりかねないという心配もある。

綿谷委員 先生からして、どういった人かわかならない人を学校に呼ぶ難しさがある。

長谷委員 安全が保証できないと学校は許可しにくい。

高橋座長 それらの課題がありながらも、より学びに役立つようなことを学校の中に取り込みたいという気持ちがこのような表現となっている。

蠣崎委員 キーワードは社会教育であろう。どの町の自治体にもある教育委員会の中にある社会教育課には、実に様々な人がいる。スポーツ指導員、文化系、学術的な分野と、身近なところでは博物館の学芸員、エコミュージアムセンターの指導員など。学校から直接ではなくとも、教育委員会に間に入ってもらっても良いだろう。そのために教育委員会がある。もっと教育委員会を頼ってもらいたい。社会教育課で、このような人材がいらないかと問い合わせしてみて、いない場合は近隣の町社会教育課に相談しても良い。標茶町から鶴居の小学校へ、鶴居村から標茶の小学校へという形で良い。人のつながりはいろいろなところでつながっていくので、せっかく6ページ(1)に社会教育を担う人々がと記載されているので、もっと教育委員会を挟んでくれてよい。今、学校教育だけでは賄えず、社会教育と一体になって初めて教育なので、コミュニティ・スクールにしても、何にしても社会教育が中心。一番地域を知っているのは社会教育の人々。社会教育主事の方がどの町教育委員会にもいるので、その方たちは人材の宝庫。安心して任せられる人は実は多くいるはず。

高橋座長 教育の多面化、多様化、地域とのつながりなどについて、学校には教育委員会の利用の仕方に、ある種の制約がかかっていると教育の中で言われてきた。極端に言えば、踏み出すことにためらいがある。これから5年間の計画では、教育委員会に相談を持ち掛けるということも1つの方法であろうし、学校の中に外の様々な知識を入れる、人を招くということを考えていきたい。そのための提言が計画案に書かれている。実現するための方法を考えていかななくてはならないが、例えば、学校でも学術的な学びを取り込みたいと考えた場合、高校では特にそのレベルを上げるには大学との連携を考えていく必要があると思うが、どのように考えるか。

渡辺委員 湖陵高校はスーパーサイエンスハイスクールの指定校なので、その予算を活用して、大学の先生を呼んだり、地域の方と連携するといった機会は比較的ある。一方で、学校の先生は自分で教えたのではないか。教えられないことはできないという状況もあるだろう。探求活動を変えた際も、自分のテーマであれば一生懸命指導し、生徒のテーマの場合は指導でなくファシリテートになるが、やはり先生自身がやりたいこととは姿勢が違う。先生方の意識を変えていくことも必要だろう。

長谷委員 生徒に学びを委ねるような授業は普及しておらず、一部の教師しか実践できていない。

高橋座長 任せることができれば、少し道が開けるということか。

渡辺委員 探求活動の中で釧路市の市民講座を利用したりと、少しずつ出来てきている。学習指導要領の改訂を踏まえ、来年度がカリキュラムを検討する山場となる。社会に開かれた教育課程と言われており、作る段階、来年度が一番のチャンスと考えている。探求活動、教科を中心に、そうならざるを得ないような教育課程を如何に作るか。恐らく、どの高校もそのような段階にあるだろう。湖陵高校では、探求活動を一生懸命行っており、研修計画を生徒が作り、審査の結果採択されればオリジナルの研修にお金を付ける事もできる。トリカブトが抗癌剤になる研究があることを知った生徒が、薬科大学に研修に行く。初めて身近なところから提案が出てきた。釧路湿原の研修でこのようなフィールドワークを行いたいという提案が生徒から挙がってきた時には後押ししていきたい。少なくともスーパーサイエンスハイスクールの指定校である間は、そういったことが出来るようにしていく。湖陵高校の生徒は、与えたことは期待以上のことをやってくれるが、自分で決めて失敗してもよいので自分がやりたいことにチャレンジするということが足りないということが先生方の課題。推薦入試も導入し、この高校で何かやりたいという生徒に入ってほしい。湖陵にはそういった場所があるので、そういった中学生に来て欲しい。PRの課題もある。湖陵では勉強をさせられる部分もあるが、させられる勉強から、勉強の質が変わるチャンスが探求だと考えている。そういう場をスーパーサイエンスハイスクールを中心に作っているが、なかなか浸透しない。

高橋座長 先生もそういったことを誘っていくこと、発想の柔軟さが必要なのであろう。例えば、本日会場に展示してあるボードの中で、イラクサをお茶で飲んでみようというテーマがあるが、先生はこれをどのように捉えるであろうか。自分が何も関心がないことを生徒が言い出した際に、どうしたら良いのだろうか。

境委員 とても良いことだと思う。標茶小学校の今回の担任の先生の良いところは、子どもから出てきた課題を受け止めて、決して突き放すのではなく、一緒にみて研究しようというスタイル。これが素晴らしいと思う。教えなければならぬとなるとしがらみがあり、自分に知識がないとすごく恥ずかしいと思ってしまう先生方が多く、自分の知っているテリトリーで子ども達にやらせようとしてしまう。一緒になって勉強しようというスタイルになった時に、子どもはすごい力を発揮するのではないかと思う。例えば、イラクサの研究にしても、先生はちゃんと安全性などを調べている。だからこそ、こうした研究が出来る。先生も一緒になって勉強している。研究発表ボードを使っている帯広の学校も見てきたが、先生は完成させたい、出来たものを作りたいと考えてしまう。その気持ちは理解できるが、見た目は素晴らしくとも、子どもに質問した時に、その中の範囲でしか答えられない。標茶小学校の子どもたちは、聞いたことに対して自分からこうなんだと言える力を持っている。これはとても素晴らしいこと。失敗しても良いし、最後の結論までいかななくてもよく、なぜ結論までいかなかったか考察できれば良い。そういう力を手伝ってあげることが、とても大切であろう。標茶小学校のやり方というものを見て、今年は本当によくやったなと感じている。

蠣崎委員 40人近い学級を担当が一人で頑張ってきた。このイラクサの研究の考察が興味深く、2種類のお茶が同じ味だったので、違う味を作ってみたいと書いている。

境委員 木道の研究をしている子も、この先続けていけば傾かない木道を作るかもしれない。ネタがいっぱい隠れている部分は、担任の指導を超えている。これから主体的な学びと言っ

ているが、湿原を通して子どもたちがこれを研究したいという事を先生が認めてあげるようなスタイルでやっていくことができれば、釧路ならではの授業開発になっていくのではないかと思う。

蠣崎委員 ボードの中で、釧路湿原が守られる理由が知りたいというものがある。この協議会で重要な課題の1つで、5年目にして、ようやくこうしたテーマの研究が出てきた。なぜ釧路湿原を皆は守ろうとしているのか、この素朴な疑問が、行動計画で言う所の湿原の価値の認識につながる部分。これを研究した子の中でも、もやもやしているのだろうと思う。

高橋座長 本に書いてあることではなく、自分の感性で思った疑問であろう。自分の素朴な思いにたどり着いている、出発点に立てたという気がする。

蠣崎委員 5年目にして、子どもが持つ課題の質が変わってきていることが、この研究に象徴されている。キノコ、やちぼうずなど、ピンポイントで対象に目が向いていたものが、大きく捉える課題がようやく出た。

境委員 自分で試している研究が多くなった。水がどこから来るのかを知るために、実際に木が生えている場所に水を撒いてみて、地下水が出てくるのか確かめてみた。雨が降り、その水が直接湧いていると思っていた子が、自分で実験をしてみて、それが違うことを理解する。すごいことだと思う。

蠣崎委員 児童も先生も毎年違うが、学校で積み重ねがある。

長谷委員 年々良くなっているのか、担任によるのか。

蠣崎委員 この湿原学習については標茶小ではしっかりと前年の担任から引き継ぎが行われる。

長谷委員 どのような引き継ぎをしているのか。

蠣崎委員 発表会に見に来ていたりする。

長谷委員 それであれば、積み重ねていけるように思う。

高橋座長 少しずつ成熟してきている。

蠣崎委員 作り方も次第に変わってきている。

高橋座長 話は尽きないが、2月に開催予定の釧路湿原自然再生協議会で提案され、了承が得られれば、この計画に基づいて学校支援ワーキンググループの活動を組み立てていくことになる。その時に、様々なアイデアを出していただいたり、議論いただきながら、この活動を広げていきたいと思っている。今後もよろしくお願ひしたい。

本日予定していた2つの議題を終えたので、事務局にお返しする。

事務局 本日は今年度最後のワーキンググループであるが、充実したご議論をいただいた。いただいたご意見を次年度の取組みにも反映していきたい。委員の委嘱は年度毎にお願いしており、次年度も参加をご検討いただきたい。境委員や教育委員会、教育局の皆様には、引き続きご参加をお願いしたい。異動がある場合には、釧路で行われている湿原学習について、後任の方に引き継いでいただけるようお願いしたい。これで第10回湿原学習のための学校支援ワーキンググループを閉会する。

以上